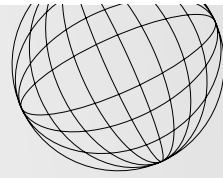


世界をみつめて1

コンピュータ今昔物語



梶川 裕司

数少ない自慢の一つであるが、私は、何百年に一回であろうと思われる僥倖に遭遇したことがある。それは30数年前、コンピュータ時代の幕開けを眼前に目撃したことである。

その頃、1970年代、私が大学院時代に最初に出会ったコンピュータは、コンピュータとは呼ばれていなかった。それは『大型計算機』というものだった。その頃、コンピュータというものは、SF（San Franciscoではなくscience fictionの略）の中に出てくるもので、大体、ストーリーの最後には「自我」を持って人間を滅ぼしていた。SF史上、一番有名な反逆コンピュータは、アーサー・C・クラーク「2001年宇宙の旅」に出てくる『HAL』だと思う。SF史上屈指の名作の一つだと思うので、ぜひ読んでみてもらいたいが、その後、「ターミネーター」を経て「マトリックス」に至るまで、人類は、コンピュータによって何度も壊滅的打撃を与られている。

コンピュータが自らの意志を持って行動する・・・現在では、それも有り得るなあ、と思えることは30年前には、空想の話でしかなかった。その当時のコンピュータは、ひたすら計算する機械でしかなかったのである。しかしそれが速い。統計処理の權威の先生が『タイガー計算機』で半年かかってする計算を、わずか1時間でこなしてしまう。『タイガー計算機』とは当時、主流であった計算機の商品名であるが、それは決して電卓ではない。その機械の特徴は、使っている人の腕が太くなることである。もし気になる方は、ネットで『タイガー計算機』を検索して見てもらいたい。

さて、私が最初に出会った大型計算機は、価格は10数億円。教育学センターの2階、30畳ほどの部屋を占領し、王者のような威圧感を持ってそこに存在していた。私は、恩師から、大

型計算機でデータ処理をしてこいという指示を受けて、恐る恐るその部屋に入った。そこにはエアコンが効いていた。当時、大学にエアコンがあるなどということは考えられなかった。しかし大型計算機は30を超えるとシステムダウンしてしまう。だから人間のためでなく機械のためにエアコンがついていたのである。京都の夏は暑い。私はそのエアコンのとりこになった。

そういう不純な動機で、まったく専攻とは関係のない教育学センターに出入りし始めたが、そこには後に日本の情報教育の基礎を作ることになる先生がいらした。その先生が、われわれ学生と雑談しているとき、大型計算機を見ながら、とんでもないことをおっしゃった。「こんな何年かすれば、これぐらいの大きさになるよ」と、手を30cmぐらいの幅に広げてみせる。何を言っているのかとと思っているうちに、パーソナル・コンピュータ（ここからPCという呼び名になった）が発売された。日本で最初に商業ベースに乗ったパーソナル・コンピュータはNECのPC-8000シリーズだと思うが、BASICというプログラム言語でプログラムを組めば、計算だけでなく、絵まで描ける。たしかに大きさは30cmぐらいだが、その能力は、大型計算機に太刀打ちできるはずもなかった。しかし1990年代、ついに教育学センターから大型計算機が消えた。その仕事をPCに譲ったのである。現在、皆さんが使っているPCにインストールされている統計処理ソフトは、30年前、私が使っていた10億円の大型計算機の数百倍の早さで計算をしてくれる。それも私が何十時間もかけて、プログラムを組んでいた作業を、その統計処理ソフトはクリック数回でやってしまうのである。

かじかわ ゆうじ（教授・教育心理学）

（このコーナーは4回にわたって掲載されているものです。）